

人権保育専門講座1（三重県委託事業）

## 障がい児共生保育 ～大切にしたい視点～ 知り合う・繋がる・響き合う

棚田 純子 さん（ちゃいんどネット大阪）

人権保育専門講座1は、ちゃいんどネット大阪理事の棚田純子さんに、「障がい児共生保育 ～大切にしたい視点～ 知り合う・繋がる・響き合う」をテーマに、松阪・伊賀・鈴鹿の3会場でご講演いただき、72名の方にご参加いただきました。

棚田さんからは、障がい児共生保育をすすめるうえで大切にしたい視点を、事例を挙げながらお話しいただきました。また、グループワークをとおして、参加者一人ひとりが「ともに育ち合う保育」の具体的なイメージを共有しました。



### はじめに -人とともに生きようとする力を育む-

「ともに育ち合う保育」は、0歳児から始まります。0歳児のクラスであっても、周りの仲間と生活することが嬉しいという感性を育てる視点は重要です。保育者が「ほら〇〇ちゃんが見てるよ」「〇〇ちゃんが隣に来てくれたよ」と、日常的に声をかけていくことが「ともに育ち合う保育」につながっていきます。私は、子どもが社会で生きていくうえで、大切にしなければならないことは「人とともに生きようとする力」だと考えています。そのために、「支援を必要とする子どもの周りにいる子どもたちに、どんな力をつけることが必要か」を真摯に考えていくことが重要です。支援を必要とする子どもと周りの子どもが、人間として本当に対等な関係を築けているかを問うことがスタートです。

### 支援担当とクラス担任の役割

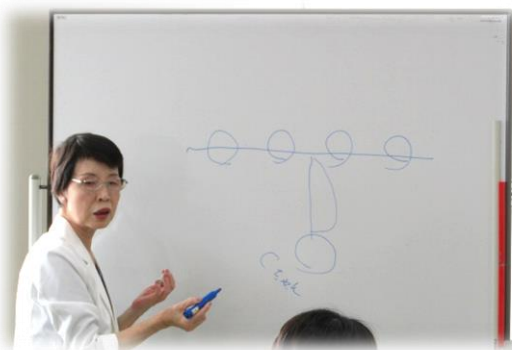
#### ◆支援を要する子と周りの子をつなぐために

まず、園としてどんな共生保育をめざすのかを共有することが何よりも大切です。支援を要する子が在籍するクラスだけの問題とするのではなく、園として考えていく必要があります。支援を要するAさんを含むクラス運営をすすめるために、クラス担任はどう動き、支援担当はどう動くのか。私自身は、障がいのある子がいれば、自動的に支援担当がつくという考え方は違うと思っています。支援加配が必要かどうかは、子どもの課題や必要な配慮を整

理した結果明らかになるものだと思うからです。障がいのある子のなかには、周りの子と一緒にクラス運営が可能な子もいれば、一から周りの子との関係を築くための支援が必要な子もいます。

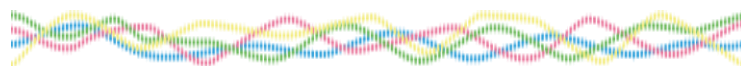
支援担当の役割は、すべての子どもを横並びにするために、発育発達を促進することではありません。そうではなく、基本的な人との関係を築くための土台づくりのためのフォローや身体面のフォローなど、支援を要する子を含むクラス運営をスムーズにするための役割を担っているのです。つまり、支援を要する子と周りの子をつなぐための役割を担っているのです。こうしたことを、クラス担任と支援担当は共通理解しておくことが重要です。

では、クラス担任はどのような役割を担うのでしょうか。支援を要するAさんには支援担当がついているから、Aさん以外の子どもたちを見ていけばよいのでしょうか？これは、全く違います。支援担当がいようとまいと、Aさんを軸とするクラス運営をすすめていくことがクラス担任の役割です。これは、個別支援計画とクラスの指導計画を連動させていくということです。周りの子どもたちのAさんへのかかわり方は、クラス担任の姿勢に大きく影響



をうけます。自閉傾向の強い子どもの場合、一から愛着関係を築く必要があるため、支援担当とAさんが個別にかかわる時間も必要です。しかし、そんなときでも、クラス担任が「今、Aさんどうしてるかな？」といった言葉を周りの子に投げかけていくことで、周りの子どもたちがAさんに関心をもち続けることにつながります。周りの子どもたちは、担任のAさんへのかかわり方、姿勢をよく見ているのです。

## 子どもどうしの対等とは？



### ◆お互いが気持ちを出し合うことで対等な関係を

「対等」ということについて考えられたことはあるでしょうか？簡単に言えば、同じ立ち位置に立っているかということになります。一見すると仲良しで、誰かを排除しているようには見えなくても、注意深く見ていかないとはいけません。気づかないうちに、子どもたちのなかに「自分たちと違う子」「赤ちゃんだからしてあげる」といった意識がはびこっていることがあります。これは、Aさんにとって人間としての尊厳が傷つけられている状態です。人間として対等の関係とは言えません。そうではなく、お互いが気持ちを出し合ってもよいということに気づいていけるような保育者の声かけ・姿勢が大切です。そのことは、「気持ちを出し合える関係を築けているか」というクラス全体の仲間づくりにもかかわってきます。

まず、「違っていてもいいよ」という感性を子どもたちに育むことが必要となりますが、そのためには、おとなが「違い」を認めていなくてはなりません。「この子って、いつもみんなと違うことするよなあ」という雰囲気クラスの中にあるのなら、「違っていてもいいやん。これもAさんのやりたいことだから」「でも、Aさん、こっちでも楽しいことしてるから来てみない」などと保育者が声をかけていくことが必要です。こうしたやりとりのな

かで、支援を要する子と周りの子がつながっていくことが重要なのです。

あるシンポジウムで、障がいのある方が自分の体験談を語ってくれました。その方は、小学生の頃、ノートをとるのをさぼっていて友だちに注意され、「ぼくは、障がい者やからええねん」と答えたそうです。すると、終わりの会で「〇〇くんは、都合のいい障がい者やと思います」と、たくさんの友だちから言われたそうです。その方は、後日、クラスみんなに泣いて謝ったそうです。そして、「あの時、『障がい者やからしょうがない』と言われていたら、僕の人生は変わっていた。一人の人間として対等に自分のことを見てくれる空間で育つことができ本当によかった」とおっしゃっていました。「対等」とは、どんな関係なのかがよくわかるお話でした。この方は、小・中・高と豊中市の地域の学校で育ち、就職活動をするまで「自分の障がいを意識したことはなかった」とおっしゃっていました。インクルーシブ教育がいかに充実していたのかが分かります。

### ◆一人ひとりの段階を見極める

以前、ある場で「対等な関係をめざすために、特別扱いをせずに何もかも同じにします」という声が出されました。果たしてそうでしょうか？私は、特別扱いは必要ないと思いますが、どの子にも多かれ少なかれ配慮は必要だと考えています。10の配慮が必要な子もいれば、1の配慮が必要な子もいるのです。

友だちとの関係をなかなかつくれず、おとなとの関係ばかりを求めるCさんという子がいました。この子の課題は、おとなとの愛着や信頼がまだ弱いことでした。おとなとの愛着や信頼を築けていないと、友だちとの関係を築くところまでいかないのです。担任の先生は、友だちとの関係を築かせたいという思いから、Cさんが愛着を求めてきても、「友だちと遊びなさい」と返していました。そのため、Cさんの愛着欲求は満たされないままでした。そこで私は「10分でも15分でも、Cさんとの時間をつくってみませんか？」と提案しました。担任の先生は「クラスの子どもたちは30人いるのに、Cさんだけに時間をとっていいんですか？不公平じゃないですか？」と聞いてきました。この場合、Cさんは人への愛着や信頼を培って、友だちとの関係を築く力の基礎を育もうとしているのです。Cさんは、まだ友だちとの関係を築くというスタートラインに立てていません。同じスタートラインに立つことができるよう支援することで、初めて周りの子どもたちと対等な立場に立てるのです。



### ◆お互いを知り合う機会をつくり出す

また、保育者は、子どもたちが対等な関係を築くために、周りの子にどんな力をつけるのかを明確にする必要があります。例えば、「Aさんを遊びに誘える」「Aさんの気持ちを聞こうとする」「Aさんとの遊びを面白いと思える」など、到達点をはっきりさせておくことが重要です。みなさんも園・所にいる子どもたちをイメージして、到達点を考えてみてください。対等な関係は、「そこに相手への尊敬があるか」がキーワードとなります。「〇〇ちゃん



は言ってもわからないから」と相手を下に見たり、「〇〇ちゃんは赤ちゃんだから」と何から何までやってあげたりする関係は、決して対等とは言えません。子どもたちのなかに、「やってあげる」という意識が見えたとき、まず、保育者が「やさしいね」ではなく「これは対等な関係とは言えない」ととらえられる感性をもっておく必要があります。

「なんでAさんは、〇〇ができないの?」と聞いてきた子がいたとします。こんな時、「Aさんに直接言ってみる?」など、聞いてきた子とAさんが直接かかわる機会をつくっていきけるように返していくことが重要です。4・5歳児ぐらいだと、「どうしてだと思う?」と聞き返し、どう思っているのかを出させても良いでしょう。大切なことは、周りの子どもたちが直接かかわり合うことで、友だちのことを知る体験をたくさんできるようにすることです。例えば、保育者が「グループのみんながそろわないと、給食は食べないよ」と伝えるだけで、子どもたちはお互いのことをたくさん知る体験ができます。ある園で、自閉傾向と診断され食事が苦手な子がいました。グループがみんなそろって給食を食べることがなかなか実行できないので、周りの子どもたちは困り果てました。担任は「じゃあ、〇〇ちゃんは何が好きなのか、お母さんに聞いてみようか」と子どもたちに投げかけました。お母さんに聞いてみると、「ハンバーグ」が好きだということがわかったので、給食でハンバーグが出た日に「〇〇ちゃん、ハンバーグだよ」と言って呼びに行きました。でも、その子はみんなのところに来ません。そこで子どもたちは「ハンバーグを持って行って見せたらどうだろう?」と考えます。実際にそうしてみると、その子はみんなのところにやって来て、一緒に給食を食べることができました。「今日は、〇〇ちゃんと給食食べられるね」と、みんなは心から喜びました。たった一つの約束事を決めたただけですが、子どもたちがお互いを知り合っていく機会をつくることのできたのです。



## 「ともに育ち合う保育」の意義

子どもたちが園・所で一緒に生活することの意義は、将来にわたって地域で一緒に生きる仲間をつくることです。社会に出て仕事に就いた後も、何かにつけて声をかけ合えるような関係を築くことが「ともに育ち合う保育」の目標です。そのために、人との関係をキーワードとした保育をすすめていく必要があります。人との関係を築くためには、障がいがあるかないかにかかわらず、どの子も、必要に応じて他者に助けを求めたり、しんどいことも含めた自分の気持ちを出したりする力が必要となります。「ともに育ち合う保育」を「障がいのあるAさんをみんなに追いつかせるための保育」ととらえてしまうと、周りの子どもたちに人との関係を築く力は育めません。Aちゃんと生活することで、周りの子どもたちは、友だ

ちの得意なことも苦手なことも含めた特性を理解し認めていく力を身につけることができます。「ともに育ち合う保育」は、支援を要する子と周りの子のどちらにもねらいをもった、「両輪の保育」なのです。

## 子どもの行動を肯定的にとらえて、拡げる

子どもどうしが知り合うための声かけは、意識していないとなかなかできません。日頃から、研修等を通じて、事例を取り上げながらシミュレーションをしておくといよいでしょう。

知り合う機会を豊かにするためには、子どもの行動を肯定的にとらえて、周りの子どもに返していくことが必要です。子どもたちの行動には、必ず意味があります。「暴れる」「大声を出す」「部屋から出ていく」などの行動の裏に、どんな気持ちも潜んでいるのかを丁寧に見ていくことが大切です。もしかすると、自分を認めようとしなれないおとなの姿勢が原因かもしれません。また、ざわざわした環境で落ち着かず、部屋を出ていったのかもしれない。おとなとの愛着関係が築けていないので、動いていないと不安なのかもしれません。自分のことを見てほしいという合図なのかも知れません。障がいの有無にかかわらず、子どもの行動には意味があるのです。行動の意味に気づくことができれば、「それなら、こうしてみよう」と手立てを考えることができます。逆に、行動の意味を探らなければ、手立てを講じることができないので解決に向きません。



言葉だけが気持ちを表すサインでは決してありません。「自分の気持ちを言っごらん」と迫っても、なかなか子どもは自分の気持ちを話しません。気持ちを言葉にすることは、おとなであっても難しいことなのです。言葉には出していないけれども、表情が物語っていたり、仕草が物語っていたりすることがあります。子どもたちが様々な表現で気持ちを表していることにアンテナを高くしておく必要があります。

## 障がい児共生保育(「ともに育ち合う保育」)で大切にしたいこと

### ①両輪の保育

- ・支援を要する子と周りの子のどちらにもねらいをもった保育であること

### ②子ども一人ひとりを一人の人間として尊重する視点

- ・表情、仕草など非言語の表現を含めて、その子がどうしたいのかを読み取り、その子の視点に立つこと

### ③Aちゃんと周りの子がどれだけ知り合えているか

- ・子どもどうしが知り合うための活動や声かけに配慮すること
- ・「できる」「できない」の価値観ではなく、子どもの行動を肯定的にとらえて周りに拡げていくこと

#### ④「〇〇ちゃんはどうしたいかな？」と考えられる仲間のつながりを！

- ・知り合う活動を続けることで、子どもどうしが理解し合い、Aちゃんの意味を尊重する関係性をつくること

## 障がい児共生保育(「ともに育ち合う保育」)実践に向けて

### 保育者の役割は

- ★活動をとおして、子どもたちどうしが知り合う機会を豊かにすること
- ★支援を要する子と周りの子、それぞれにつけたい力を見極めること
- ★その子の困り感を理解したうえで保育をすすめること

### 「ともに育ち合う保育」とは

- ★Aちゃんが今、「どうしてほしいと思っているか」、「Aちゃんが困っていないか」を理解し支えられる仲間をつくること
- ★「それでいいよ」「そのかわりすてきだよ」と子どものかわりを認め拡げていくこと
- ★困っている友だちをほうっておかない、気づいて支え合える仲間をめざすこと

「ともに育ち合う保育」は、保育者が子どもの姿から学ぶことがスタートです。「この子は どうしたいか」を出発点として保育をすすめてほしいと思います。そして、「ともに育ち合う姿」のイメージを園全体で共有しながら、「ともに育ち合う保育」をすすめてください。

### 参加者の感想

- 自分が支援を必要とする子にどうかかわるかばかり考えていたが、大切なのは、その子が周りの友だちと一緒に成長していくことなのだと感じました。日々の保育は毎日手探りで、反省することも多いです。クラス担任だけでなく、園として子どもを見ていくことを学べて良かったです。
- 加配担当をしていますが、支援を必要とする子と周りの子どもたちのかかわり方など、どういう言葉がけなどをしていけばよいか、迷うことはたくさんありました。本日の講演やグループワークを通じて、自分を見直すことができました。
- 人権問題を“知る”ことが大切のように、保育の中でも、互いに知り合うことでその子の理解につながると教えてもらい、そのとおりだなと思いました。
- 障がいのある子に限らず、すべての子どもにとって、周囲の様々な人たちと認め合える関係づくりが必要であり、その土台は保育士のかかわり方が影響することを、実践を聞かせていただいて感じました。共に生きやすい社会をつくる子どもたちの姿を見据えて、日々の保育にあたっていきたいと思います。
- 今日の話聞かせていただき、支援担当の先生と連携がうまくできているか、子どもを否定した言葉がけをしていないか、日々の保育をふり返る機会になりました。一人ひとりのよさや違いを、まずは教師が受けとめることが大切だと学びました。